



前田 利夫

細菌といえは、私たちに病気をもたらす「悪いやつ」と考えがちです。ところが、本書では私たちの体内に住む細菌がいなくなることに警鐘を鳴らしています。

数十兆個の細胞でできているヒトの体には、1万種におよぶ100兆個もの細菌が住みついているといいます。母親の胎内にいるとき、胎児に常在する細菌はいません。「出産の過程とその直後に、人体は何兆個もの細菌に占拠されるようになる」。そして、各人は、その人独自の細菌集合体をもつようになります。

その細菌がいなくなると、どうなるか。若年性糖尿病、花粉症やぜんそくなどのアレルギー、肥満など、近年急増しているさまざまな病気にかかわっていることを本書は立証しようとしています。著者は、30年以上にわたって、そのかわりを明らかに

現代病急増と医療への警鐘

かにする研究にとりこんでいます。ヒトの体内の細菌に異変をもたらしているのが抗生物質です。抗生物質は、病原性の細菌を引き起こす病気の治療にきわめて有効です。しかし、現代社会で使われる大量の抗生物質が、体内の常在細菌を消滅させ、その結果として「現代病」を急増させていると、著者は指摘します。

抗生物質が使われているのは、病気の治療のためだけではありません。家畜の「成長促進」効果を得るために大量に使用されています。「現在アメリカで販売されている抗生物質の七〇から八〇パーセントが、ウシ、ニワトリ、七面鳥、ブタ、ヒツジ、カモ、ヤギといった何億頭もの家畜に使用されている」。抗生物質の使用は薬剤耐性の新たな病原菌も出現させています。

体内細菌と私たちの健康について新しい視点を提起し、抗生物質の正しい方を真剣に考えることを呼びかける本書は、現代医療への重大な警鐘です。

サイエンスライター
(みすず書房・3200円)